

## 真宗教団論序説

龍 溪 章 雄

ここでは「真宗教団論」研究のための予備的考察として、(一)真宗教団論の基本性格、(二)その定義及び根本課題、(三)その方法的立場、以上の三点をめぐって論じてみたい。

### (一)真宗教団論の基本性格

真宗教団において所謂「教団論」が問題とされるに至ったのは、比較的最近のことである。しかし既に戦後逸早く、西谷啓治氏がこれを問題としておられる点に、今特に注目したい。西谷氏は、キリスト教神学においては「神学」と「教会」が神学の課題、考察対象とされているが、従来伝統的仏教教学（諸宗派の宗学）では、その「教学」と「教団」が教学の課題として論究されなかったことを指摘し、そこに仏教の弱点があると批判しておられる。この西谷氏の指摘の如く、真宗教学史を概観する時、江戸期の教学、近代以降の教学、そのいずれにも「教団論」が欠落していることに気づく。このことは恐らく、所謂本願寺教団が寛如の案出した本願寺史観をその教団原理とし、従ってまたその教学が教団体制に從属した教団護用教学であったために、教学が教団を自覚的に対自化・相対化・課題化し得なかったことに起因するものと思われる。そして教学における「教団論」の欠落は、教学と教団それ自体の未成熟性を意味する。「教団や教学がその自覚性にまで高まらないならば、それは所

謂宗教的実存ではない」からである。而して、かかる教学と教団の未成熟性の克服はひとえに、教学が「教学」と「教団」を課題として教学すること、即ち教学的関心に基づく「教学論」と「教団論」を媒介として、初めて可能となる。その意味で、最近の「教団論」論議は、教団の「宗教的実存」性回復の試みとして、十分に注目評価されねばならない。

およそ信仰の思想的表現が教学であり、社会的表現が教団である。信仰はこの両面をもつことによつて主観的立場から客観的立場へ止揚され、真に歴史的となる。しかも、この「教学」と「教団」がまた新たに信仰にとつて課題となる。それらは共に信仰の表現とはいへ、過誤多き凡夫の営為でもある限り、そこに不純的・非本来的要素が混入する危険が常に存するからであり、その純粋性・本来性回復のための自己批判的吟味の必要が生じて来るからである。かくして信仰の学的営為たる教学において、「教学を問う」こと、「教団を問う」こと、即ち「教学論」と「教団論」が必然されて来る。従つて目下の主題たる「教団論」とは、どこまでも教学的課題として成立するものであり、すぐれて教学的営為としてののみ意味をもつものといえる。この点で我々の「真宗教団論」は、一方では、信仰を紐帶とする宗教集団に関する論との意味で、行政レベルでの「宗教法人団体論」でもなく、他方では、教団の現状への批判に基づく本来的教団像の探究との意味で、現教団体制の護用的な「本願寺教団論」でもない。これら両教団論に簡ぶ「教学的教団論」——これが「真宗教団論」の基本性格である。

(二)真宗教団論の定義及び根本課題  
「真宗教団論」とは、教学的関心に基づく「真宗教団」について

の論考研究であり、その論究の対象たる「真宗教団」の歴史的考察と教義学的考察とを含めて、親鸞によって開顕された浄土真宗なる仏教の教団の本質・本来像・使命等の究明をめざすものである。しかも殊に現代という時代状況の中で教団論の考察は、すぐれて現代的事柄として、どこまでも「現代真宗教団像」の模索を意味するものであらねばならぬ。基本的には親鸞の教団観に依拠するとしても、それを更に現代世界の文脈の中で把え直し、歴史的社会的現実状況下での再確認乃至再創造という作業にこそ、究極根本の焦点をあてねばならない。そこに「真宗教団論」の根本課題が存する。

### (三) 真宗教団論の方法論的立場

「真宗教団論」が教義学的営為として成り立つところ、歴史的と教義学的との二つの考察方法の中でも、特に後者の教義学的考察をこそ中心とすべきであることはいままでもない。歴史的考察はいわば教義学的考察のための前提的補助的なものとして、その十分の重要性を有する。我々の「真宗教団論」は、歴史的考察を踏まえつつも、主に教義学的立場からなされねばならない。

しかも、その教義学的立場について更に厳密に言えば、そこに二つの方法論的立場が考えられる。一つは狭義の教義学的立場、二つは倫理的立場である。換言すれば、狭義の教義学的視角からする教団論と、倫理的視角からする教団論とである。前者は教団の本質的《構造》の批判的検討を意味する。これは親鸞の教団観の中でも殊に、教団の本質即ち成立原理と現実的在り方（構造）を親鸞が如何に把握していたか、を探究するものである。また後者は教団の社会的《役割》の批判的考察を意味する。これは親鸞の教団観における対社会的側面を考察し、それに依拠しつつ、現代の時代状況の中で

の教団の役割使命を説明するものである。しかしこの場合、親鸞の時代と現代とでは時代状況も具体的な社会構造も異なる故に、あくまでも現代社会の文脈の中で把え直しでなくてはならぬ。従って倫理的視角とは、従来の教団論に一般的であった伝道教化論の視点のみならず、より広く政治的社会的問題に対する教団の姿勢・関与・行動の在り方（政治倫理・社会倫理としての社会的実践）如何をめぐる視点を意味する。従来の真宗教団論ではこの点への関心と問題意識が欠落、もしくは希薄であるように窺える。実はいかかる意味での倫理的視角からの教団論こそ、特に「現代真宗教団論」に要請されているものである。かくして「真宗教団論」は、教義学的（存在論的）と倫理的（実践論的）との二視角をその方法論的立場として併せもつことによって、初めて真に「現代真宗教団論」となり得るのである。

- 1 特に一九七〇年代に入ってからのものである。
- 2 西谷啓治氏「教団と信仰」（教学第一巻第六号）。
- 3 この「本願寺史観」については、拙稿「教学において『伝統』とは何か」（龍谷大学大学院真宗研究会紀要第一五号）参照。
- 4 西谷啓治氏前掲論文。
- 5 「教学論」に関しては、拙稿「真宗教学論序説」（前出真宗研究会紀要第一四号）参照。
- 6 かかる広いパースペクティヴにおける倫理的視角は、キリスト教神学の教会論において重視されている。

（龍谷大学大学院）